

本棚への憧れ

名城大学法学部准教授 北見 宏介

地下鉄車内のディスプレイで、書齋の「壁一面の本棚が憧れ」という台詞を使ったマンションのアニメーション広告が流れていた。書籍離れ、読書離れといった傾向が指摘されることがある中でも、一定数の読書家は想定され、また実際に存在するものである。がしかし、目下の自身の状況からは次のような問いも生じてくる。その壁一面の本棚がいっぱいになったときにはどうするのですか、と。

大学設置基準36条では、「研究室は、専任の教員に対しては必ず備えるものとする」と規定されている。大学の法学研究者にとって、研究室には文献置き場としての意義もあろう。大学院生のときには、マンションの広告と同様の憧れを、個人研究室というものに対して抱いていた。その念願であった個人研究室を実際に使用できるようになり10年弱が経った。直前の使用者であった先生が残してくれた書架に加えて数本の書架も追加してきたが、それらの収容能力を超えた書籍・雑誌や未整理のコピー類、書類が、目下のところ研究室にあふれている。

こうした状況に至るのは、書籍や雑誌に関しては、自らの思考と行動様式からすると当然である。出版元で品切れという事態は最も回避したい事象の1つと考えている。書籍や雑誌の廃棄や購読中止も考えていない。「〇年使っていないものは捨てるべし」という片付け論の教えは、研究室の書籍に関しては到底当てはまらないと思っている。むしろ、年度末は退任者の廃棄図書を研究棟の古紙回収箱から拾い集める一大機会だと考えている。ある憲法の教授から聞いた、「買わなきゃ読まないよ(=だから買え)」という言葉が、買っても読んでいないという現実はさておき、自身をこうした行動に向かわせているのかもしれない。加えて、自身の関心もよく知る国際書房営業担当者から撃たれた書籍紹介という弾丸は、私の心臓を貫通する。ここには買わないという選択肢はない。まさに増加するばかりである。

他の研究者の方々は文献の増加にどのように対応されているのだろうか。目下の私にはあまりにハードルが高い、書籍の廃棄という作用について、どのような基準でそれを選択し、捨てるという意識まで自らをいかにして至らしめるのか。電子化という方法は効果的かもしれない。スキャナの使用といったことは私も行っている。だが慣れの問題なのか、複数の文献を同時に参照しなければ、作業はなかなか進まない。本の頁を内側に折り込んで2つの頁を同時に参照することもある。開く本、さらには参照したい頁の数だけ、端末ないしウィンドウが欲しくなる。講義で電子版教材を導入する際の、(私にとっての)1つの障壁となるかもしれない。他の研究者の方々はどのように活用しているのか。お知恵を冀求している。

柿崎環教授のエッセイ「片付けられない研究者」(法学セミナー 571号(2002年)105頁)は、整理整頓された研究室への羨望を語る一方、周囲には「無法地帯と化した研究室のほうが圧倒的に多い」とする。これを心のよりどころにしつつも、これまで他の方の研究室を訪ねるとき、不快感を与えるほどにじろじろと室内を眺めてヒントを得ようとしてきた。しかし、依然として状況は改善されないままである。研究室に筆者がやってきて、室内を眺めまわしたら、「本棚に本が収まりきることが憧れ」というやつがまだ片付けていないのだと思って、お許しをいただきたい。